

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02595

研究課題名(和文) 何が「被害者」の連帯を可能にするのか 「薬害HIV」問題の日英比較

研究課題名(英文) What Enables the Solidarity of the "Victims": Japan and Britain Comparison of the Drug-Induced Sufferings

研究代表者

本郷 正武 (HONGO, MASATAKE)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：40451497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)：薬害概念がきわめて日本の文脈に依存した固有のものであることを、薬害エイズ問題を中心事例に、日本と初期条件に近い英国などとの比較から明らかにした。その特質は、サリドマイドやスモン、肝炎といった異なるイシューの被害者たちを「薬害被害者」として連帯させる機能に加え、原疾患である血友病や障害など従来の連帯との「切り離し」を促す点にある。さらに、公害訴訟運動の社会的背景から薬害概念が提示された点も指摘でき、今後の調査研究課題となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英国など海外事例との比較から、薬害概念が日本に特有の概念であること、個別の医薬品による集成的健康被害を「薬害」と名指す社会的背景を公害問題や個々の患者組織の活動から明らかにした。これまでも社会学や薬学での薬害定義や分析・検討はおこなわれているが、イシュー横断的かつ通史的な独自の薬害研究となっている。加えて、現在編集集中の初学者向けテキスト『薬害と現代社会(仮題)』により、薬害教育をさらに推進することが可能となる。

研究成果の概要(英文)：In being inherent that the concept of Drug-Induced Sufferings (DISs) extremely depended on the context of Japan, we clarified the issue of HIV/AIDS from a comparison with the U.K. that Japan and an initial condition were near in a central example. We add it to a function to let thalidomide and SMON, the victims of the different issue such as the hepatitis be joint as "DISs victim", and there is the characteristic at a point promoting "the cutting apart" with the conventional solidarity such as hemophilia or the handicap that are an underlying disease. Furthermore, we could point out the point where the concept of DIS was shown from the social background of the environmental pollution suit campaign, and it was a future research problem.

研究分野：医療社会学・社会運動論

キーワード：薬害 HIV/AIDS

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本調査研究は、日英を中心とする国際比較研究を通して、日本に特徴的な「薬害」概念がどのような要因と過程により創り出されたのかを、「被害者」の連帯可能性の観点から考察した。

いわゆる薬害問題とは、多くの患者が医薬品により享受すべき有効性(主効果)よりも副作用が上回った場合を意味するとされてきた。とりわけ従来の社会学分野による調査研究は、行政や企業の瑕疵や不作為に着目し、一方を加害者、他方を被害者と位置づけることで薬害問題を切り取ってきた。この点で薬害問題とは、集団訴訟などの形をとった、補償・救済を求める集合的な問題開示のプロセスを意味する。このような加害者と被害者を指定する問題理解の様式は、同じ被害を受けた人々を結びつけ、補償と救済を求めていくものであったが、他方で「加害者」と名指された医師や政府、製薬企業は訴訟の過程でスケープゴートとされることで口と心を閉ざし、結果として第三者による真相究明は後年の大きな課題となった。このような問題状況を受けて、本調査研究の前身にあたる養老孟司を委員長とする「輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会(2001~2009年;以下「養老研」と表記)」は、医師たちの当時の思いや教訓、さらには患者・家族の経験をライフストーリー・インタビューにより聞き取ることで、「被害者」と「加害者」双方の立場を観取してきた。とはいえ、薬害概念の分析に正面から切り込むことは上記の理由からはばかられ、薬害概念がもつ、容易に問題理解に至る枠組みを提示するという順機能と、強力な加害-被害図式により多様な声がかき消されてしまうという逆機能に分析の焦点を合わせる事がこれまではできなかった。

加えて、薬害問題理解は、少なくとも世界共通の自明のものではないことは、これまでの国際学会での報告などの反応や、研究開始前年におこなった英国の血友病患者組織 Haemophilia Society に対するインタビュー調査から仮説として浮上していた。このことは薬害にあたる英訳語が見当たらないことにも表れている。この原因は大きく二点考えることができる。まず、「Drug-Induced Suffering」などと問題や被害を引き起こした事実関係を直訳したとしても、上述した薬害概念に込められた政治的・運動的問題開示の様相までを表現できない点である。もう一つは、薬害概念が指し示す対象がかなり多様であるためである。たとえば薬害エイズ問題では、先天的に止血がままならない血友病患者に輸注された(非加熱濃縮)血液製剤は高い止血効果を有し、血友病の治療に必要不可欠なものであったが、HIV の混入により 1,400 余人が感染被害に遭った。他方、妊娠初期にサリドマイドを含有した市販薬を服用したことで胎児に上肢・下肢の奇形を生じさせたサリドマイド薬害の場合、被害を受けたのはつわり止めとして医薬品を服用した本人ではなく胎児であり、使用する医薬品の必要度にも大きな相違がある。したがって、「薬害被害者」と一括りにして理解することは、個々の薬害被害の多様性や多声性を大きく削ぎ落としてしまうことになりかねない。他方で、「薬害再発防止」を掲げた「全国薬害被害者団体連絡協議会(以下「薬被連」と表記)」が 1999 年に発足し、多様な薬害被害者たちが連帯する「被害者の再創造」が生起している。このような動きは、調査開始時点では海外で皆無とみられ、どのような要因と過程により「被害者」あるいは「薬害被害者」という連帯の形式が創出されるのか、という問いが浮上した。

2. 研究の目的

これまでの調査研究蓄積を踏まえ、薬害エイズ、サリドマイド薬害の他、日本で最初に「薬害」を掲げて訴訟運動を展開した薬害スモンなど、調査研究対象を広げるとともに、薬害エイズに関して日本と共通点の多い英国をはじめとする国際比較を目的に、薬害問題の国際発信と海外事例との対話を企図した。

薬害概念はさまざまな要素を含んだ概念であり、世界の同種の問題と比較研究の俎上に乗せる際には、従来の薬害理解である加害-被害図式を援用するだけでは不十分である。特に、日本とは被害規模や社会的背景が大きく異なる欧米諸国との比較研究は慎重に進めなければならない。本調査研究で中心的に取り上げた英国の事例は、日本と同じように集団訴訟が生起しているにもかかわらず、先行研究での言及は驚くほど少ない。実際には、日本と英国は、問題発生の初期条件や社会的背景に共通項がいくつかあることから、前年のインタビュー調査や、2018 年にグラスゴーで開催された国際血友病連盟国際会議(World Federation of Hemophilia)の機会を得て、データを収集した。本調査研究では医学系を含めた学際的な研究体制の下で、各国の先行研究や「被害者」の聞き取りデータをおもに医療社会的に分析し、国内外に「薬害」概念を発信し、「被害」概念の再考の意義を問うた。

以上から、本調査研究では以下について明らかにすることを目的とした。(1)対照的な他国との比較を試みるのみならず、初期条件で高い類似性のある英国との比較を通じて、薬害エイズを中心に薬害概念と被害者の連帯の様式を考察する。(2)薬害被害者たちがどのような連帯を模索し実現させたのかに着目することで、他の健康被害事例との対話可能性と一般化可能性を拓く。(3)長年に渡り聞き取りに従事してきた社会学者に、医学系研究者を加えた学際性の高い研究体制を構築し、「薬害」や「被害者」の多声性を検討し、国内外に研究成果を問うていく。(4)「被害」は与件ではなく、各種承認を求める動きなど社会的な相互行為を経て立ち現れる概念であることを明らかにする。すなわち「被害」経験を受け入れ(再)創造していく「Becoming Victims」のプロセスから「薬害被害」の実態に迫るといふ、従来には無い観点による調査研究である。(5)医療的問題や健康被害を以上のような観点から記述・分析する研究は世界に例を見ない野心的なプロジェクトである。

3. 研究の方法

薬害エイズに関する先行研究では英国の事例紹介はかなり少ない一方、スキャンダル度の高いカナダやフランス、あるいは非加熱濃縮製剤の最大の供給元であるアメリカでは、HIV 感染問題に関する報告書や先行研究が既に公表されている。これら先行研究の検討から、各国の血液事業体制、HIV 感染の問題化のプロセス、血友病患者団体の動向、集団訴訟の有無、補償・救済のスタイル、といった分析項目を整理する。

次に、大英図書館には血友病患者のオーラルヒストリーのアーカイブデータが 60 件所蔵されていることが開始前年の調査から判明している。これらをトランスクリプト(逐語録)に文字化し、英国の血友病患者の置かれた社会的文脈を考察する。さらに、英国血友病患者組織「Haemophilia Society」への追加インタビューと資料収集により、こんにち先鋭化している C 型肝炎感染問題とのデータの突き合わせもおこなう。

さらに、これまでの聞き取り調査で不足している薬害エイズの東京原告団に関するインタビューデータ、ならびに日本の薬害問題の嚆矢である薬害スモンに関するインタビューを追加することで、薬害被害者としての語りとその文脈を抽出する。

国内外のインタビューデータは「Becoming Victims」プロセスとして医療社会学的考察を加える。「薬害被害者」であることは所与ではなく、創り出されるものであり、後の薬被害連での薬害被害者たちの連帯にみられるように、新たな連帯が「再創造」されることもあるのではないかと。本調査研究ではこのような「被害」経験や「薬害」概念が(再)創造されるプロセスを「Becoming Victims」として概念化する。以上の理論的検討はおもに医療社会学の観点を中心におこなうが、本調査研究には複数の医学系メンバーが所属していることから、多声的な「薬害」「被害」概念の彫琢が可能となった。その中には、ISA(International Sociological Association)トロント大会(2018年7月)での RC15(Sociology of Health)と RC25(Language and Society)とのジョイントセッション「Being Victim」での複数メンバーの成果報告、日本社会学会のテーマセッション、日本保健医療社会学会での報告を目標とした。加えて、最終年度に制作する最終報告書、さらに薬害初学者のためのテキストの刊行を目指した。加えて、医学系メンバーなどによる「薬害教育」の実践により、学生らの薬害理解を深化させるとともに、医薬品をめぐる健康問題と社会問題に理解のある医療従事者の育成を推進した。

4. 研究成果

本調査研究で明らかとしたのは、下記の大きく三点に集約できる。

(1) 薬害概念による連帯と切り離し

英国との比較調査研究により、日本の薬害概念が、スモンやサリドマイドなど異なる問題の被害者たちを連帯させた点に加え、英国の血友病患者のオーラルヒストリーなどから、薬害エイズに関して、別様の連帯があったことを明らかにした。日本では、訴訟を闘い、十分な補償を得るために不可欠な資源として薬害概念があり、そのため、イシューの差異を超えて被害者たちを結びつける機能を果たした。このことは、サリドマイド薬害被害者が、薬害エイズ問題が起きた際に「また自分たちと同じ「薬害」が起こってしまった」という感覚をもった点によく表れている。英国ではいわゆる他の薬害問題とのつながりは皆無であり、「薬害被害者」になることなく、個別の問題に対する補償運動を展開していた。これらが薬害概念のもつ連帯機能である。

他方で、薬害エイズの場合に顕著であるが、患者組織など従来の活動体からの「切り離し」が、薬害問題では指摘できた。薬害エイズでは、もともと原疾患である血友病コミュニティが患者運動を展開していたが、エイズ問題の生起によりコミュニティが機能不全となり、HIV 感染者たちは患者会とは別個に原告団を立ち上げての活動を余儀なくされた。このことは、現在でも血友病コミュニティの中で元原告は特別な位置を占める点からも明らかである。英国では血友病患者(のみ)の権利擁護・補償運動として活動しており、1990年代に長らく WFH 会長を務めたアイルランド人は、薬害問題を血友病コミュニティの問題として切り出し、強大なリーダーシップを発揮した。一方で、同じ HIV 感染であっても、薬害運動と血友病の運動のいずれも、性感染などとの差別化が目的の一つとされていたことは共通していた。

以上の考察は、日本社会学会のテーマセッション「Becoming “Victims”——「被害者」になるプロセスの社会学的検討」(2017年10月)および ISA トロント大会にて、本調査研究メンバーが企画したとのジョイントセッション「Being Victim」(2018年7月)での複数メンバーによる口頭報告のかたちで成果報告した。

(2) 公害問題との連続性

薬害概念の始原をたどるために薬害スモン問題を調査研究対象とした点も特筆できる。調査研究では、当事者の聞き取りや、保健医療社会学の観点から当時に聞き取り調査を敢行していた故・飯島伸子の調査資料が収められた「飯島伸子文庫」(常葉大学附属図書館)での資料の渉獵をおこなった。

薬害スモンは伝染病からくる偏見や差別の問題により患者は健康問題に上乘せされた苦しみを受けていたことを飯島は指摘している。スモンは単なるキノホルムによる健康被害の次元を超えて、仕事や人間関係や家族関係にも影響を与える甚大な被害を及ぼしていた。しかも、その被害の上乗せは、結果的に「スモンウイルス説」を採る医師たちによりなされた点が特筆できる。

現在では、スモンの原因は下痢に処方した整腸剤キノホルムであると判明しているが、1960年代にはウイルス説が優勢であり、1970年時点でもキノホルム説とウイルス説が併存した状況であった。それゆえ、よかれと思って処方した整腸剤により、かえって下痢が悪化しスモンを招くという転倒が広く生じた。結果、ウイルス説を採る医師・病院ではキノホルムが投与され続けるという悲劇が続いた上、ウイルス説により、隔離・排除の方便が横行した。そのことは、訴訟運動に対して「学生運動の残滓」であるとする偏見も存在するなど、当時の薬害被害者を取り巻く厳しい状況を示していた。

しかし、スモン訴訟運動が先行する一連の公害訴訟の戦術を採用し、薬害概念を提唱することで薬害概念が定着していったことは見逃せない。1970年代まで薬害とは農薬による健康被害や覚醒剤など危険ドラッグの乱用と混同して使用されていた不分別な概念でしかなかった。スモン訴訟運動は明確に薬害問題という問題理解のカテゴリーを提示し、後続の薬害問題に影響を与えたことになる。公害問題とのより詳細かつ具体的な連続性については、今後さらなる考察が必要となるが、戦後のいきすぎた資本主義・産業主義が産み落とした諸問題に対する反応としてとらえることにより、薬害概念のもつ意義がより明らかにできる。

上記の研究成果は、日本保健医療社会学会大会（2019年5月）にて複数メンバーにより、薬害スモン、サリドマイド薬害、薬害エイズ、さらに類縁事例として食品公害に関する報告をおこなった。

(3) 『薬害と現代社会（仮題）』の執筆

本調査研究の成果は、上記学会報告や論文のみならず、医療社会学や医学・薬学・看護学の実際の教育現場にも医学系メンバーにより還元されている。しかし、医療社会学の観点から編纂された薬害に関する教材は少なく、上記の研究成果を踏まえたものは本メンバーにより制作する他ないという結論にいたった。

現在編集中の『薬害と現代社会（仮題）』は、『薬害の社会学』（1985年）では言及されていない薬害エイズや薬害肝炎問題を取り上げている他、初学者にも対応可能な講義用テキストを企画している。(1)基礎編では、薬害概念の定義や歴史、薬害を取り巻く医療制度のあり方などを概説することとした。(2)各論編は、分担研究者の専門領域を踏まえて、薬害エイズをはじめ、サリドマイド薬害、薬害スモンなどをコラムを含めて構成した。(3)応用編では、食品公害やメディア表象など、隣接領域を学ぶ人にも関心を向けてもらえるように配慮している。

研究期間中に上梓することは叶わなかったが、2021年春の刊行をめざして改稿を重ねている。今後は、より専門性の高い研究書の刊行を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 本郷正武	4. 巻 17
2. 論文標題 有園真代, 2017年, 『ハンセン病療養所を生きる 隔離壁を砦に』世界思想社.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 241-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 吉武由彩	4. 巻 27(1)
2. 論文標題 社会的連帯をめぐる現状分析 社会関係とボランティア的行為の状況	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 松岡 一郎	4. 巻 2
2. 論文標題 薬学教育の枠組みを「知る」ことからFD活動を考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 薬学教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24489/jjphe.2018-032	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 藤田景子・操華子	4. 巻 39(1)
2. 論文標題 実践の根拠と臨床知を知る なぜ医療機関DVへの対応が必要なのか?	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ナーシング	6. 最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉武由彩	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 R. テイトマスの「贈与関係論」再考 社会的連帯の形成に向けて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 SATO Akihiko	4. 巻 68
2. 論文標題 Contemporary Issues and the Possibilities to Inquiry into Them in the Sociology of Deviance:	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Japanese Sociological Review	6. 最初と最後の頁 87~101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.4057/jsr.68.87	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 種田博之	4. 巻 128
2. 論文標題 証明としての 粹に生きる ある血友病HIV感染者のライフストーリー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西学院大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 21-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 哲彦	4. 巻 35(1)
2. 論文標題 アメリカにおける薬物と政治の帰結として的大麻取締法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科治療学	6. 最初と最後の頁 73-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 哲彦	4. 巻 51
2. 論文標題 薬物政策をめぐる旅：ポスト・エイズ時代における薬物と社会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 こころ	6. 最初と最後の頁 46-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中塚 朋子	4. 巻 49
2. 論文標題 副教材における写真を用いた「薬害」の表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 就実論叢	6. 最初と最後の頁 111 - 125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hongo Masatake	4. 巻 29
2. 論文標題 Book Review	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Japanese Sociology	6. 最初と最後の頁 107 ~ 108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/ijjs.12108	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本田 宏治	4. 巻 57(1)
2. 論文標題 「英国」の「血友病患者」が「被害者」として構築される過程：1980年代の「HIV/エイズ」問題のテキスト分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋大学社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 吉武 由彩	4. 巻 34
2. 論文標題 献血を重ねることと生きづらさ：聞き取り調査の結果から見る献血動機の一断面	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代の社会病理	6. 最初と最後の頁 57-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉武 由彩	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 献血行為に関する計量的分析：2012年調査のデータを用いた分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福岡県立大学人間社会学部紀要	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件(うち招待講演 5件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 HONGO, Masatake and Tomiaki YAMADA
2. 発表標題 Becoming Victims of Drug-Induced Suffering (DIS): The case of Japanese hemophiliacs with HIV
3. 学会等名 International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 SATO, Akihiko
2. 発表標題 Discourse Analysis of Drug-induced Sufferings in Japan
3. 学会等名 International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 YAMADA, Tomiaki
2. 発表標題 Becoming Victims in Yakugai HIV Incident in Japan as victims of drug-induced sufferings , in Language of Victims: Toward Advocating Contemporary Social Sufferings
3. 学会等名 International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐藤嗣道
2. 発表標題 「薬害教育」を体系的に位置づけるための視点：多声的薬害概念と技術者倫理教育の導入
3. 学会等名 日本社会薬学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡一郎
2. 発表標題 英国の薬学教育システムと薬剤師生涯研鑽へのつながり
3. 学会等名 日本薬学教育学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤吉圭二
2. 発表標題 薬害アーカイブズの社会的機能に関する考察 薬害被害者団体資料の整理・調査をもとに
3. 学会等名 関西社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本郷正武
2. 発表標題 「薬害」概念の下で連帯する被害者 「薬害HIV」問題にみる被害者の多様な結びつきの可能性
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 吉武由彩
2. 発表標題 献血者とは誰か？ データからひも解くボランティア精神の現在と献血推進
3. 学会等名 日本血液事業学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中塚朋子
2. 発表標題 「薬害」を学ぶための副教材「薬害を学ぼう」の制作過程の検討 「薬害」の概念とイメージをどのように伝えるのか
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐藤哲彦
2. 発表標題 悪 から 害 へ ハーム・リダクションと逸脱処遇の現代的变化
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山田富秋
2. 発表標題 薬害HIV感染被害者に対する心理的支援について
3. 学会等名 沖縄国際大学総合文化学部研究報告会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松原千恵
2. 発表標題 患者さんの“やりたい・なりたい”を叶えるために
3. 学会等名 兵庫県血友病看護ネットワーク（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松岡一郎
2. 発表標題 薬学教育の枠組みを「知る」ことからFD 活動を考える - 「四国4 薬学部連携事業」のFD 活動と海外薬学教育調査
3. 学会等名 日本薬学教育学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 FUJITA, Keiko and Mutsuko Takahashi
2. 発表標題 Experiences of Domestic Violence Victims Raising Children While Living with Abusers in Japan
3. 学会等名 International Confederation of midwives (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宇田 和子
2. 発表標題 健康被害の分類と制度化の帰結：薬害と食品公害の比較
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 哲彦
2. 発表標題 「薬害」の社会史のために：産業「災害」の対概念としての健康「被害」
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤 嗣道
2. 発表標題 薬剤師は薬害に対して何ができるか
3. 学会等名 日本薬剤師会学術大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種田 博之
2. 発表標題 スティグマ（や災難）から「薬害」被害者へ
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 種田 博之
2. 発表標題 制度としての「薬害」被害者：ヴェーバーの「カリスマの日常化」の視点より
3. 学会等名 関西社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤吉 圭二
2. 発表標題 何がどこまで知らなければならないのか：薬害における被害者団体アーカイブズの意義について
3. 学会等名 関西社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本郷 正武
2. 発表標題 保健医療社会学者・飯島伸子の経験：「薬害被害」を証すること
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 本郷 正武
2. 発表標題 健康被害と薬害被害：保健医療社会学者・飯島伸子
3. 学会等名 東北社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田 富秋
2. 発表標題 薬害事件における「被害者」アイデンティティの獲得
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 盛山 和夫、金 明秀、佐藤 哲彦、難波 功士	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 社会学入門	

1. 著者名 薬学編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 328
3. 書名 薬学 理工系の基礎	

1. 著者名 Tamar M.J. Antin, Virginia Berridge, Charlotte De Kock, Karen Duke, Christopher Hallam, Rachel Herring, Geoffrey Hunt, Axel Klein, Torsten Kolind, Susanne MacGregor, Emma Milne, James Nicholls, Aileen O'Gorman, Garry R. Potter, Emile Sanders, Akihiko Sato, Camille May Stengel	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 262
3. 書名 Risk and Substance Use: Framing Dangerous People and Dangerous Places	

1. 著者名 種田 博之	4. 発行年 2019年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 300
3. 書名 パラドクスとしての薬害エイズ	

1. 著者名 長谷川 公一・李 妍ヤン・帯谷 博明・高橋 知花・青木 聡子・中川 恵・朝井 志歩・土田 久美子・金 明秀・大井 慈郎・小杉 亮子・山本 薫子・篠原 千佳・伊藤 綾香・板倉 有紀・本郷 正武	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 392
3. 書名 社会運動の現在	

1. 著者名 桐野 豊・松岡 一郎・飯原 なおみ・土屋 浩一郎・丸山 徳見・末永 みどり・中妻 章・山口 巧・京谷 庄二郎・加藤 善久・川添 和義・高取 真吾・清水 圭子・今川 洋・二宮 昌樹・佐藤 智恵美・通 元夫・宮澤 宏・佐藤 陽一・牧 純・宗野 真和・阿部 信治・福山 愛保・際田 弘志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Amazon Kindle (電子書籍)	5. 総ページ数 630
3. 書名 世界薬学探訪記：四国の全薬学部による海外薬学視察団 最新報告 日本の薬学、薬剤師はどう変わるべきか？	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	蘭 由岐子 (ARARAGI YUKIKO) (50268827)	追手門学院大学・社会学部・教授 (34415)	
研究分担者	宇田 和子 (UDA KAZUKO) (90733551)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 哲彦 (SATO AKIHIKO) (20295116)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	佐藤 嗣道 (SATO TSUGUMICHI) (50305950)	東京理科大学・薬学部薬学科・講師 (32660)	
研究分担者	種田 博之 (TANEDA HIROYUKI) (80330976)	産業医科大学・医学部・講師 (37116)	
研究分担者	中川 輝彦 (NAKAGAWA TERUHIKO) (10440885)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授 (17401)	
研究分担者	中塚 朋子 (NAKATSUKA TOMOKO) (50457131)	就実大学・人文科学部・准教授 (35307)	
研究分担者	藤田 景子 (FUJITA KEIKO) (60587418)	静岡県立大学・看護学部・准教授 (23803)	
研究分担者	藤吉 圭二 (FUJIYOSHI KEIJI) (70309532)	追手門学院大学・社会学部・教授 (34415)	
研究分担者	本田 宏治 (HONDA KOJI) (20516900)	東洋大学・社会学部・准教授 (32663)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	松岡 一郎 (MATSUOKA ICHIRO) (40157269)	松山大学・薬学部・教授 (36301)	
研究分担者	松原 千恵 (MATSUBARA CHIE) (80814368)	奈良女子大学・国際交流センター・特任助教 (14602)	
研究分担者	山田 富秋 (YAMADA TOMIAKI) (30166722)	松山大学・人文学部・教授 (36301)	
研究分担者	吉武 由彩 (YOSHITAKE YUI) (70758276)	福岡県立大学・人間社会学部・講師 (27104)	